

Title	マーガレット・コール著 革命のなかに成長して
Sub Title	
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1954
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.47, No.9/10 (1954. 10) ,p.987(117)- 988(118)
JaLC DOI	10.14991/001.19541001-0117
Abstract	
Notes	書評及び紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19541001-0117

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

機械的・トラフィック的な部門に投下され、結局國民的生産力の形成へ連なるとは云えないのではないか。ロード・アイランド型に於ても、生産工程へ直接タッチせず、寧ろ流通部門を擔當し、資本の附加的投下は自己資本により行われ、商業資本は次第に相對的重要性を失つて行く點。而してそのパートナーの中から次第に富を蓄積し、産業資本家へと成長して行く者も現れるが、商業資本は競争者の出現を恐れて之を獨占的に抑止せんとする動きを示す點。前貸制の性格をどう規定するか。パートナーシップの内容、最後に販賣組織の問題等々。之等の問題の解明には勿論彼地に於ける特殊研究の進展に俟たねばならぬが、ここでは與えられた紙数の關係上、スミスの近業「フォール・リヴァーの綿織物業」を僅かに上述の問題點に即して紹介するに止める。

ロード・アイランドに於ける綿工場設立はプロヴィデンス商業資本に加えて多くの土着(農民・職人)資本と、英・蘇蘭技術者の援助により行われた。この水力工場は紡績工程のみ行い、準備・織布工程は手労働により工場外で行われ、労働力は最初は周邊地方、後には更に内陸タウンから供給された。その成功はこの地方を刺戟し、多数の工場が設立された。Fall River Manufactory (一八一三年設立)は資本金三萬弗(六〇株)、内技術者に一五株、その従兄弟六株、土地及び用水権提供者四名に合計二三株、残りは大部分はフォール・リヴァー其他の住民たる一二名に一二株宛分配された。Troy Cotton and Woollen Companyは資本金五萬弗を百株に分け、土地・用水権提供者等に總株の半分を、残り五〇株をフォール・リヴァー其他の住民二〇名に分配した。この種の多数の工場は一八一四年の恐慌と一八一五年以後の英商品の氾濫によつて閉鎖を餘儀なくされた。この危機を乗切る爲にはボストンの大商業資

本によるローウェル型工場の登場をまたねばならぬ。ボストン商人は用水権を購入して直接工場設立に参加するか、又はこの用水権を賃貸して收利せんとし、或は工場用建物を河川沿いに建て之を個人又は會社に賃貸する「賃貸工場」等の諸方法によるのが織物業中心地では普通だつた。フォール・リヴァー周邊の綿工場設立の事情も綿工業の其と略々同じであり、織工業者と綿工業者とは、或は同一人又は親戚であり、或は土地・用水権の所有・貸借關係を通じてフォール・リヴァーの支配階級を構成していた。

フォール・リヴァーの二工場 Fall River Manufactory 及び Troy Company について資本の源泉を地域的に見れば、その約八一%はフォール・リヴァー及び周邊のタウンにその源泉を有し、之等二工場を含む五工場に就ての其は五九%弱である。一八二〇年代にはプロヴィデンス及びニュー・ベッドフォードからの投資が見られるが、之は五工場の全資本の約三二%を占めるに過ぎず、その一部は一時的投資で追加投資は行われず、資本の源泉としては重要ではない。寧ろ地方的資本が自己蓄積して行く傾向が次第に重要となつて行き、原資本より附加資本が重要性を増して行く。(The Iron Works が好例)。上記五工場の原出資者五二名中一七名は總資本の約八六%を占め、(1)不動産所有權(2)製造業(3)海運・商業にその源泉を有している。(1)は土地・用水権提供によるか、農業からの蓄積による資本、(2)は製造業(主に綿工業)及び商業による資本、(3)は地方的及び都市の海運・造船業者・船主の資本である。總じて地方的な、平均出資額以下の無名の小出資者(農民・船長等)が最も重要であつた。

イランドの諸工場に訓練を受けて、フォール・リヴァーの技術者・製造業者となつたが、フォール・リヴァーの發展後は此處の工場に訓練を受けた者が次第に重要性を増して行つた。一八四〇年代になると英・愛蘭からも労働力が流入する様になつた。斯くてフォール・リヴァーは立地條件と土着資本に恵まれていたが、水力が比較的小規模で、ボストンの大資本を惹付ける程の條件を持たなかつた。(以上)

以上のスミスの分析により(紙数の關係上詳論するのは次の機會に譲るが)我々は、見られる様に、ロード・アイランド型工場の成立史に於ける空白をかなり埋める事が出来た。彼地に於ける最近の同様の工業都市等の史的的研究、例えば Holyoke (Mass.), Naugatuck (Conn.), Peabody (Vt.), Chicopee (Mass.), New Bedford, Brooklyn, Norfolk, Memphis, Rochester, Cleveland, Chicago, Detroit, Milwaukee, Minneapolis, St. Paul の研究は、ハーヴァードの經營史的研究と共に我々の期待する所大である。(一九五四・七・二〇)

(中村勝 記)

マーガレット・コール著

「革命のなかに成長して」

Margaret Cole, Growing up into Revolution, 1949, London, pp. 224.

第二次世界大戦が終つた直後、回想録や自叙傳というようなものが、一時わが國の讀書界をふうびしたことがある。まだ、さめやらぬ戦争の興奮と、ともかくもあのいやな戦争がおわつた

書評及び紹介

という解放感のいりまじつたなかに書かれたたきさんの回想も、のなかにには、もちろん良心的なものもあつたが、しかし、いかかわしいものや威勢のよすぎるものもまた決して少なくなつた。戦争中の自分の非良心的な行動を正當化しようとしたり、また自分を英雄にまつり上げたりするようなものばかり多くて、すなおに前非を悔い新しい出發を誓うというように、われわれの心の奥に訴えるようなものが、あまり書かれなかつたのはまことに残念であつた。

外國の事情はよくわからないが、そういう意味では、このマーガレット・コール女史の「革命のなかに成長して」などは良心的なものの一つであるといえよう。ここに云う革命とは、特に革命的な一つの事件をさすのではなく、二十世紀初頭から第一次大戦をへてファシズムの興隆、そして第二次大戦と云う、まことに激動と苦悶の半世紀をさしたものであり、そのなかで著者がどのように成長し、どんなことを體驗し、何を喜びそしてまた悲しんだか、色々なエピソードとともに語られている。それは一人の女性の傳記であるばかりでなく、さながら二十世紀英國社會の縮圖でもある。著者マーガレットは現在、労働黨の理論家として、またその尅大な著書をもつて有名なオックスフォード大學の教授、G・D・H・コールの夫人であつて、彼女自身もまたリヴァプール大學の教授としてすでに多くの著書がある。マーガレットの文章は女性らしいデリケートな描寫で、あるが、夫君コールの流れるような美文に比べると讀みにくいことおびたらしい。そのためかコール夫妻の偉大な先輩であつたシドニー・ウェップ夫人、ベアトリースの自叙傳「わが修業時代」に比べると、いささか物足りない感がないものでもない。しかしこの書のなかにもられてゐるエピソードのなかに興味深いものがあるので、その二三をひるつてみたいと思ふ。

まづ、せまり来る戦争の危機、さげがたい第一次大戦を當時のイギリスの青年たちはどんな気持ちでむかえたであろうか。イギリスはすでに一八九九年から一九〇二年にかけて、いわゆるボーア戦争によつて、南アフリカの一角にオランダ系移民がつくつたトランスヴァール共和国を攻めほろぼして、そのころこの侵略政策は世界の人のいざおりを買ったものであつたが、この戦争を序曲として英國にも、ひしひしと大戦の氣配はこくなつていつた。一九一四年戦端がひらかれるや、青年たちのなかにはこれが未曾有の大戦に發展するのではないかという不安を本能的に感じたものも少くなかつた。そしてこういう青年たちは自分の信念によつて戦争反対、徴兵拒否の態度をとつたのである。これらの人たちは「良心的反対者」と呼ばれたが、とくにクウェーカー教徒たちは絶対的平和主義者として最後まで戦争反対の態度をかえなかつた。だが一九一六年ついに陸軍徴兵法が制定されるや、これらの人たちは國賊・叛逆者と呼ばれ、要注人物としてブラック・リストにのせられ、その数は四萬七千名にも達したといわれる。こういう人たちは、收容所にいれられ、なかにはフランスにおくられて銃殺にされたものも多かつたのであつて、このことをマーガレットは感慨深げに書きしるしている。(pp. 58-60) してわたくしもまた感慨深くこゝを讀んだのである。

つぎに、コール夫妻がウェップ夫妻の後輩であることはさきにもべたが、やがてコールはギルド社會主義となつてフェビヤン社會主義に反逆したことは有名である。のちに二人は和解するのだが、しかしマーガレットの語るところによると、不和の原因は思想の上ばかりではなかつたようである。たとえば、ウェップ夫妻はフェビヤン調査部にはげしい仕事と資料のたえまない蒐集をやらせておきながら、調査員たちには低賃金を

強いて賃金値上げに反対し、絶対にゆずらなかつたそうである。(pp. 51-52) 低賃金の實態の研究に没頭していたウェップ夫妻が、みづから、その調査員たちに低賃金を強いなければならなかつたとは、何と皮肉なことではないか。若き日のG・D・H・コールがウェップ夫妻にそむいたのも、案外こんなところにある理由の一つがあつたのかもしれない。(一九五四・六・一九)

(飯田 鼎)

U・K・ヒックス著
異博一・肥後和夫譯
『財政學』

現代の經濟學諸部門に於ける理論的發展が經理學一般理論との深い内面的結合という紐帶の下に押進められた如く、財政理論も同じ紐帶の下に同じ展開軌道の上に乗つて間斷なき新展開を示そうとしてゐる。その動向はカメラリズムの殘滓を纏つた「既成財政學」が、尅大な自己完結的・技術的體系の支配下にあつて傳統的固定的問題領域の内に踞踏し、財政學プロパールの課題を追求した態度との間に埋め難い落差を残している。尤も此處ではもたらされた落差に照應する歴史的・現實的基盤自體に對する假借なき批判・検討を直接目的とする事は出来ない。基調は、その期待を容易に裏切るだろう。この事實は、H・D・イルトン・M・E・ロビンソン、A・C・ビグラー等の厚生經濟學的英國財政學書の系譜に親しんだ人々には、これ又容易に首肯できる事と思う。

しかし「財政學」が有する基本的理論構造、分析手法、そして又具體化された敘述形式を覗くならば、ドールトン以下の著書に對して有する「財政學」の新たな側面と優れた特質とは自づから顯現せざるを得ないだろう。端的にその諸特質を擧示してみよう。(1)、規範部門としての財政學は、ヒックスを驅つて新厚生經濟學の價值視點よりする「客觀的」政策基準を撰擇せしめる。所謂產出高の極大化Ⅱ「生産の最適状態」と満足の極大化Ⅱ「効用の最適状態」の二公準が定式化される。(2)、このように財政政策の究極的基準をば雇用を超えて經濟的厚生に求める事は、原理的にもケインズ理論の分析手法を排除することにはならない。逆に讀者はケインズ以後の財政理論の成果が「財政學」に於て見事に攝取・消化されている事を看取するだろう。(3)、加うるに英國財政史及び財政制度に對するヒックスの並々ならぬ學識と洞察力とは、その實證的財政學研究の各分野を貫いて現代財政收支の規模・構造・機能等の優れた浮彫を可能ならしめてゐる。茲では理論が常に現實の内に交流せしめられ、理論は理論・現實は現實として分離する所謂財政學の白痴化は見出し得ないだろう。

三部(廿章)のプロローグをなす第一部(六章)「政府勘定」は、まづ統一的國民經濟組織内に於ける異質的な、然し相互に密接不離の關係にある國家經濟(財政部門)の地位を確定する事より出發する。それはヒックスの場合社會的共同欲望充足の機能を果すべき機關としての財政體が、「生産者及び雇用者として立ち現われる」事を意味するに外ならない。しかしこの財政機構の主體者たる國家自體に關しての立ち入つた省察は見出す事が出来ない。即ち、戦前より戦後に到る政府支出及び收入の構造・豫算の編成・執行・決算・即ち支出統制の技術的過程・國民經濟に於ける政府統合勘定についての詳述等、主として英

國に素材を求めての財政制度及び財務行政一般に關するヒックス独自の分析とサマライズに終始している。この點特に現代英國財政研究を志す人々にとつては、被益する所尠からざるものがあるだろう。

第二部(十章)「租稅論」は、第一部に於て試みられた財政の現状分析を基礎とし、租稅論を中核としたヒックス財政理論の展開が實現される、その主題への新らしい接近方法こそ、我々は種々の觀點より注視すべきであらう。例えば周知の傳統的租稅分類法(轉嫁の有無を基準とする直接税・間接税の分類等)は打捨てられ、一般税と部分税、又は所得・資本税と支出税に置換えられる。前者の分類については、ヒックス自身「本來便宜的なものであつて論理的なものではない」事を強調する如く、その區別は經濟學一般理論が個別的經濟單位(各企業等)の立場よりする部分均衡的接近が有利な場合と、國民所得水準決定の要因たる消費・貯蓄・投資に關する一般分析が必要とせられる場合とに夫々對應すると考えられる。後者の分類に於ては、傳來的租稅轉嫁論に對するヒックスの疑義と近年論争の一課題となつた國民所得に於ける政府生産物の解釋に對するヒックスの見解とが反映され積極的提言となつて現われている。この分類形態それ自體についてはヒックスの場合特に新らしいわけではなく、その前者「The Finance of British Government, 1920-1936, (1938)」に於て既に見出すことが出来る。然し夫々の租稅が内包する所の特性については、申すまでもなく「財政學」の存在理由を確保する如き意義が附與せられてゐる。即ち、從來の轉嫁分析の躰きの石であつた所得税はその視點をビグラーの如く納稅者の消費、勤勞及び貯蓄に與える効用効果に移すことにより回避するのではなく、「市場における財の交換價格に含まれてゐるものは支出税だけで所得税は